

安岡章太郎の短編小説「ガラスの靴」考 —透明な物語に埋め込まれた屈辱・権威・〈公〉のモチーフについて—

小野 絵里華

要旨

本稿では、「第三の新人」作家、安岡章太郎（1920— ）の文壇デビュー作「ガラスの靴」（1951年）の作品分析をおこなう。「第三の新人」という呼称が、先の「戦後派」たちの作家に比べ、難解さ・思想性・政治性がないということをさして使われたように、通常、本作品は、占領下という時代状況にも関わらず、私的世界が描かれた、どこか童話的な透明な物語として読まれてきた。しかし、本稿の分析で分かるように、そこには、確固とした、敗戦という現実へのまなざしがあるのであり、主人公は、新しいアメリカという〈権威〉＝「第二の父」のもとで、敗戦国民という屈辱感を全面的に抱えていることが分かる。そこには、江藤淳が1970年の論考で、対米依存型の日本社会を「「ごっこ」の世界」として捉えた事態が、まさに〈私〉のレベルで演じられているといえる。

キーワード：敗戦国民，占領，孤児，権威，父

はじめに

安岡章太郎の文壇デビュー作「ガラスの靴」は、1951年、「日本文壇のエスプリ・ヌーボー（新精神）だ」と北原武夫に賞賛され、「三田文学」に掲載された¹⁾。占領下の大学生「僕」と米軍接收家屋のメイド悦子との恋愛という極めて私的な世界が描かれた本作品は、当時、「（第一次・第二次）戦後派」の作家たちが、戦場体験を元に「難解」で「思想的」な作品を発表していたのに比べれば、確かに、読みやすく、「新精神」を感じさせるものであった²⁾。それは、結局、安岡章太郎や吉行淳之介を始めとする作家たちが「第三の新人」³⁾として、政治性・思想性の欠如した、〈私〉的世界ばかりを「散文的くだらなさ」⁴⁾でもって描く作家たちとされるに至る要因でもあった。

実際、「ガラスの靴」は、例えば、清岡卓行による評価のように⁵⁾、「芸術的な均衡の美しさ」「ふしぎな清純さ」を持った作品として読まれ、そこにある〈公〉性、政治性に目が向けられることはなかったといえる。それは、阿部昭が指摘するように⁶⁾、そこにある「敗戦」などどこかに置き忘れたとでもいいかげな、手のつけられないノンキさ加

減」こそが、「一切を戦争のせいにしてすまそうとする」「新時代」の逆手を取ったものである」といえるのだが、それでも、その「手のつけられないノンキさ加減」に紛れもなく影を落としている〈公〉にも目をむける必要があるだろう。そこで、本稿では、〈私〉的世界のみを描いたとされる「第三の新人」安岡章太郎の文壇デビュー作における、今まで見過ごされてきた〈公〉性に焦点をあてる。

1. 占領下で〈孤児〉であるということ

この短編の登場人物は、語り手「僕」と、米軍接收家屋のメイド悦子と、その家屋の主人、グレイゴー中佐だけである。「僕」は、「猟銃店」の住み込みのアルバイト学生で、ある日、客であるグレイゴー中佐の家に散弾を届けたことをきっかけに、悦子と知り合いになる。そして、グレイゴーが長期休暇で留守にしている間、この米軍接收家屋という他人の家で、二人は擬似的な家族ごっこを演じていく。

二人の家族構成については、ほとんど触れられないのだが、「僕」のシガレットに火をつけてやる悦子が、「火の出るのを怖れるみたいに」「不器用に」マッチをつまんでいたのを見て、「僕」は、彼女を「そだちのいい人ではないのか」と思う。あるいは、悦子自身が、小学生の頃、「自分は優等生だった」と語る。彼女がメイドになるまでの経緯は作中全く説明されないが、悦子は「そだちのいい」人間が敗戦によってやむを得ずメイドになったかのように登場している。問題は、ここで、二人の家族構成が徹底的に隠蔽されているということである。〈家族〉の排除、これは、占領下という状況で見直した際、同時代に共有されたある一つのビジョンを担ってくるといえる。

周知のように、敗戦後、GHQ 指導のもと、天皇制支配の解体過程として家族改革が行なわれた。1947年12月には民法改正によって、戸主制度は廃止され、「家父長」＝〈父〉という〈権威〉は名実ともに失墜する。それは、江藤淳や磯田光一が問題にし続けた戦後の「父の不在」という事態である。

敗者である日本人、日本人男性にはもはや威厳など存在しない。例えば、占領下で「日本人女性」である「パンパン」がアメリカ人兵士と手を組み、「日本人男性」を切り捨てるというお馴染みの構図をここで思い出してよい。小熊英二は、「人生設計を破壊された若者にとって、彼らが抱く屈辱感が大きければ大きいほど、米兵の存在は体格においても権力や物質の面においても巨大に映った。その米兵と、日本人女性が親しくしている光景は、彼らの自尊心を大きく傷付けた」と分析している⁷⁾。

敗戦後に登場するのは、「日本人女性」は戦争遂行へと向かった「日本人男性」による「被害者」なのだという認識であり、それは占領軍というアメリカの介入によって、「敗者＝日本人男性」を軽蔑し、「勝者＝アメリカ」にとりいる「被害者＝日本人女性」という図式を成立させる⁸⁾。

要するに、敗戦によって、「日本男性」あるいは〈父〉という〈権威〉は失墜したということである。既存の天皇制に支えられた国家が敗れた以上、そもそも敗戦国民である日本人すべてを〈孤児〉として捉えることも可能であるが、ここでは、ひとまず〈家〉というレベルにおいて、〈父〉という〈権威〉を持たない若者たちが登場していることを確認する必要がある。「僕」と悦子は、占領下で〈孤児〉にならざるを得ない〈息子〉と〈娘〉なのである。

さて、もちろん、ここで〈孤児〉というのは実際的な意味ではなく、一つのメタファーとして使用しているが、この二人は、主人不在の米軍接收家屋で二人だけの自由な恋愛を行なっていくようにみえる。ここには、二人を束縛するような〈家族〉もなければ〈権威〉もない。この作品世界には、〈家〉における〈父〉＝負けた日本人は排除されているのである。

主人不在の米軍接收家屋という食料溢れる豊かな空間で、二人は擬似的な家族ごっこを演じていく。まるで自分たちが、その家の住人であるかのように錯覚していくのである。

だんだん僕はずうずうしくなった。朝、つとめが終わると、すぐ悦子のところへ出掛けて行き、シャワーを浴びてから、居間の長椅子でひと眠りするの、いつか僕の習慣みたいになってしまった。[...] たったいままで夜番だった俺がこれからは泥棒になる、とおかしい気もするのだが、昼寝から醒めたころにはもう悦子の作ってくれるコーヒーを、「すこし水っぽい。」などと云うのだった。

この虚構空間で、〈家〉すら持たない住み込みのアルバイト学生「僕」は自分を〈父〉あるいは〈夫〉としてイメージしていく。ここにあるのは、言うまでもなく、食料が溢れ、経済力を持った、強い〈夫〉・強い〈父〉である。もちろん、そのイメージは、米軍接收家屋という借り物で成立する擬似的なものに過ぎない。そして、悦子に関しても同様の妄想を抱いていくのである。

同じことが悦子についても云えた。絨毯の上にそのまま横坐りした彼女が、片ヒジを皮のstuhlにのせて、うつむき加減に本を読んでいるときなど、うっかり僕は、彼女がずっと昔からこの家でそだてられた娘であるような錯覚を起した。

〈家族〉から切り離されている二人の若者は、主人不在の米軍接收家屋で、逆説的に、〈家族〉を求めて、家族ごっこを演じていく。この空間は一切が虚構に満ちた〈子供〉の世界である。〈家〉を持たない二人は、家族ごっこに従事し、おまけに、二十歳を過ぎて、「赤ずきんゴッコ」や「鬼ごっこ」などの「ごっこ」遊びをしていくのである。

2. ごっこの世界と占領下日本

この「ごっこ」遊びが、占領下の文脈において成り立っていることを考える時、それは、単に「童話めいて」⁹⁾見せるための仕掛けというだけでなく、あるアレゴリーを帯び始めるのに気付く。

江藤淳は1970年の論稿において、対米依存型の日本社会そのものを、「ごっこ」の世界」として描き出している¹⁰⁾。

実際、この社会ではあらゆる行為がいつの間にか現実感を奪われてしまう。

なにをやっても「ごっこ」になってしまうのは、結局戦後の日本人の自己同一性が深刻に混乱しているからである。[...] われわれの意識と現実のあいだにはつねに「米国」というものが介在している。「米国」が現実をへだてるクッションとして現存しているために、戦争も歴史も、およそ他者との葛藤のなかで味われるべき真の経験は不在であり、逆にいえば平和の充実感も歴史に対立すべき個人も不在である。

この論の発表年に注目すれば分かるように、ここでは、安保体制の継続、1972年の沖縄返還を前にした佐世保や横須賀の軍港問題、自衛隊、「米国の核の傘」といった軍事・政治的な文脈のなかで、「ごっこ」の世界」という比喩が登場する。江藤は、敗戦以来の「米国」を「クッション」にした日本社会そのものを「ごっこ」の世界」というメタファーで語るのである。言うまでもなく、江藤にとっては、「現代」日本社会を考えると、否応なく占領時代の検閲の問題が浮かび上がるのであるが、ここで、すでに1951年という当時であって、安岡章太郎が、物語の設定として占領下の米軍接收家屋を選択し、その中で、二十歳を過ぎた男女に「ごっこ」遊びをさせているのは興味深い。後に江藤が論じた〈公〉の「ごっこ」の世界」が、「ガラスの靴」のなかでは、まさに〈私〉というミニマムな世界ですでに演じられているからである。

江藤は「ごっこ」の世界」を「公的なものが存在しない世界」「公的なものを誰かの手にあずけてしまったところに現出される世界」として定義づけている。「ガラスの靴」でも、一切の「公的なもの」が排除されているように見える。そこでは米軍接收家屋という借り物＝虚構空間で、〈家族〉の排除された究極的な二者関係が描かれる。そこで行なわれる「赤ずきんゴッコ」や「鬼ごっこ」などの「ごっこ」遊びが、二人の恋愛を成立させていくのである。米軍接收家屋という〈アメリカ〉が介入する場所で、日本人の男女は「公的なもの」を〈アメリカ〉に預けて、〈私〉的な世界に没頭する。そして、その〈私〉的世界はあくまで、占領や敗戦という「現実」の（意図的な）隠蔽によって成立している。悦子が、「僕」に「オトギ芝居の片棒」を求め、「僕」自身も、その悦子の

要望に答えてやることに愉しみを見出すように、二人は意図的に〈子供〉という位置にとどまり、「現実」という〈公〉を排除する。そこにあるのは、二人の関係がついに性愛にまで発展しないことに端的に表れているように、完全な〈子供〉の世界なのである。

〈家〉から放り出されて、〈父〉という〈権威〉をもはや持たない二人は、米軍接收家屋という虚構空間で、擬似的な自由をもてあそんでいく。江藤は言う。

「米国」がひとつの現存としてわれわれの上におおいかぶさり、われわれの意識の尖端に附着しているかぎり、日本人はこの「ごっこ」の世界から離脱することができない。

3. 「カクレンボ」と迷い子の経験

さて、悦子は、「セミの一種」である「ヒグラシ」を鳥だと思っていたり、夜中に「カエルがいっぱい飛んで来て、眠れないの」と電話で訴えかけたりするように、常識的な世界とはほど遠いところにいる不思議な娘なのだが、そんな彼女は、「僕」に「カクレンボ」することを求める。

僕はいつの間にか、悦子のオトギ芝居に片棒かつがされていた。そしてそれが嬉しい。彼女の云うことをきいてやるのが、かえって僕には、彼女を自分の「持ちもの」にした感じなのだ。僕は悦子の提案するところにしたがって、カクレンボをやる。いまやこの家は、家具ごと僕ら二人のものも同然だった。

いうまでもなく、「カクレンボ」がゲームである以上、そこには「勝ち／負け」がある。しかし、二人にとってこのゲームの勝敗は有耶無耶になって終わる。悦子の「云うことをきいてやり、かえって「彼女を自分の「持ちもの」にした」気持ちになる「僕」は、服従しつつも、力関係としては〈上〉にいるような気であるのだが、このゲームにおいては、二人の力関係は幾度かの反転の末に、宙吊りになって終わる。

藤田省三は「カクレンボ」を「迷い子の経験」として捉えて分析を行なっている¹¹⁾。

この遊戯的経験の芯に写っているものは「迷い子の経験」なのであり、自分ひとりだけが隔離された孤独の経験なのであり、社会から追放された流刑の経験 [...] なのである。¹²⁾

藤田は、「カクレンボ」を「勝ち負けの一義的な二者択一を物の見事につまみ出した、この相互性の世界」と捉える。この藤田の論において、本稿で注目すべき点は二つある。

まず、鬼にとっても鬼でない方にとっても、それが「迷い子の経験」であると分析している点である。「迷い子」とは、〈孤児〉と同じ状況であるといえる。帰属する集団、〈家族〉から切り離されてしまった人間が「迷い子」でいるべく「カクレンボ」をしている。先に確認したように、この若い男女は〈家族〉という入れ物を持たない〈孤児〉であった。彼らは、帰属すべき場所や現実を排除するために、〈孤児〉でいつづけなくてはならない。

次に、「カクレンボ」を「相互性の世界」として、どちらも勝者になり得ないような遊戯として捉えている点である。「カクレンボ」という遊びは、勝者であるはずの見つからない人間が、いつまでたっても見つけれられないかもしれない、という不安を抱いてしまうことから分かるように、そこには勝者であるはずの者が、勝者でなくなる可能性がつねに潜んでいるといえる。つまり、「カクレンボ」とは、力関係の反転を絶えず含んだ遊びなのである。そして「ガラスの靴」においては、この遊びそのものが恋愛における力関係と接続される形で描かれていく。

「ウォータア・バッグの中」に隠れて、なかなか悦子に見つからない「僕」の様子である。

最初笑いをこらえるのに懸命だった僕は、退屈を感じはじめると同時に、眠入ってしまったらしい。[...] 目をさますと、家中は変に静まりかえっている。僕は階段を下りて[...] 食堂の扉をひらくと、悦子は、テーブルの上に馬鹿に大きなジェロ・パイを置いて、その前にしょんぼり坐っている。

「あら、めっかっちゃったわ。」

彼女は僕の姿をみると頓狂な声をあげた。

ここで「眠入ってしまった」「僕」は、見つけれられないという状況に不安を抱くことはなかった。そして、悦子は、「しょんぼり」して「僕」を待つしかなかったのだから、明らかに悦子の負けであろう。けれどもこの「カクレンボ」という遊戯は直ちに二人の恋愛関係そのものに接続されていくので、ゲーム終了後には誰が勝者で誰が敗者なの分からなくなっていくのである。

悦子は敗者であることを破棄し始める。パイを「僕」には絶対に食べさせない、と言うのだ。

「あなたは意地悪よ。だから、あたしもこれから意地悪にするの。[...]」

僕は、そんなことを云わずに、どうか食べさせてくれとたのんだ。[...] だんだん眠気のため来た僕は、本当に空腹になった。

「ダメよ。あたしがひとりで食べちゃうの。」

「たのむ、ひと口でいいんだ。」……僕がそういうおわらないうちに、もう彼女は直径八インチのパイを両手で口へもって行くと、舌をチョロッと出してパイの皮からこぼれそうになっているジェロを舐めた。

ところが、この悦子の逆襲をもってしても、結局、勝ち負けはうやむやに終わる。

「あ、……」

僕は、半分本気でガッカリした。彼女は [...] イタズラっぽく、僕を見て笑うと、「あなた、こっち側から食べる？」

と、口にくわえたパイを僕の前にさし出した。

僕は、ものを考えている暇はなかった。顔じゅうジェロだらけになって、僕らは接吻した。

ここで二人の恋愛における力関係を確認しよう。「僕」は、悦子の「云うことをきいてやること」で、「彼女を自分の「持ちもの」にした」気持ちを抱いていた。悦子に服従しつつ、その服従によって自分が〈上〉位に立っているように思うのである。ところが、この場面からも分かるように、「カクレンボ」を介在させた二人の力関係は絶えず反転し、揺らぎ続ける。「カクレンボ」の鬼となり負けた悦子は、ゲームで負けても、「ジェロ・パイ」を持ち出し、「僕には絶対食べさせない」と〈力〉を振るう。そして、「あなた、こっち側から食べる？」と「僕」を誘導し、最終的には、二人とも「顔じゅうジェロだらけになって」「接吻し」、力関係など全く意味をなさない地点に至るのである。

ここで、そもそも、二人には〈力〉などないということを確認しておく必要がある。米軍接収家屋のメイドとして雇われている悦子は最初から〈力〉を持つことを禁止された存在である。そして猟銃店に住み込みのアルバイト学生「僕」は、悦子を受け入れる〈家〉を持たず、グレイゴー中佐という主人から、悦子を勝ち取ることは不可能なのである。占領下で〈孤児〉として存在する二人にはどちらにも〈力〉などないのである。それはこんなところにも象徴的に表れている。二人の電話の様子である。

とりとめのない話をかわしながら僕は、ご馳走のにおいを嗅がされているときみたいに、じたばたする。こちらの言葉が全部、くらい闇の中に吸い込まれて行き、向こうからも、実体のないただの言葉の形骸だけが伝わってくる。そんななかで、僕らは棒倒しの棒みたいなの、ただ一つのことを、押ししたり引いたりしあうのだ、だが、その一つのことを、僕には何だか解らない。彼女にも、僕の云うことは解らない。お終いに彼女は、とうとう動物の鳴きマネをする。

「あう、あう、あう」

ここには二人がどちらも、そもそも〈勝者〉になり得ないこと、〈敗者〉でしかないことが示唆されている。「僕」は彼女の前で「じたばたする」が、彼女もまた、どうすることも出来ず、「動物の鳴きマネ」をするしかない。「動物の鳴きマネ」というのは、結局、意味の宙吊り以外の何物でもない。要するに、ここで「動物の鳴きマネ」をするのは無意味を提示しているに過ぎず、その行為は全く意味をなさないのだが、彼女はそれをせざるにはられない。どちらも自分の「言葉」を伝えることに失敗せざるを得ない¹³⁾。

4. 性愛の不在＝家族再生産の拒否

さて、以上のように、米軍接收家屋という借り物にいる〈孤児〉の二人には、そもそも何の〈力〉も与えられていないことは、一連の遊戯の様子と合わせて確認されるところなのだが、もう一度、二人の恋愛関係について言及しておこう。何故なら、それもまた、占領下という状況で読み直す時、一種のアレゴリーとして機能するからである。

「どちらかと云えば、」「魅力のとぼしい」悦子に、「惚れてしまうことになるろう」とは思いもしなかった「僕」だが、やがて、彼女の本気なのか演技なのかはつきりしない、「子供ッポさ」に夢中になってしまう。悦子の「耳タブに接吻」した「僕」は、後になって「自分のしたことが、よほど下卑たことに思われ」る。

僕は、悦子の了簡をはかりかねた。彼女は本当に何も知らないのだろうか。困惑した僕は、たかだか自分の唾液で女の耳を濡らしたにすぎないことを、ひどく誇張して考えた。

子供のような「悦子の料簡をはかりかね」、彼女と肉体関係を結びたくて「ムズムズ」している「僕」は、結局は、物語の最後、悦子自身に拒否されて終わる。この作品世界が〈家族〉を排除していることと考え合わせた時、この性愛の不在は重要な要素であるといえる。

二人の関係において、〈家族〉の再生産という展望は徹底的に排除されている。先に確認したように、猟銃店の夜番の住み込みアルバイトで、「住居のない」「僕」には、悦子を〈妻〉として迎え入れる場所＝〈家〉がない。また、一方、「僕」に「オトギ芝居の片棒」を求める悦子は、言うまでもなく、〈大人〉になること、〈大人〉でいることを拒否している。それは、彼女自身が、実際に、グレイゴー中佐のもとを離れるということが不可能だと徹底的に認識しているからである。だからこそ、敗戦という現実を見ないために、〈子供〉でい続けるための「オトギ芝居」が必要とされるのである。そのように、現実を隠蔽するのは「僕」もまた同じである。「僕」は悦子と性的関係を結ぼうとしつつも、彼女の要望に答えてやることによって、あくまで自分を〈子供〉の位置においてお

くのである。

ここには新たな家庭の再生産という物語が発生しえないように一切の現実的な〈家族〉が排除されているのが分かる。その代わりに、接収家屋で擬似的な家族ごっこがなされていくのである。

5. 「現実」への戸惑い

二人の虚構的な恋愛ももうすぐ終わりを迎える。「あれほど豊富だった食料」も「ほとんど尽きかけ」ている。もうすぐ主人のグレイゴーは帰ってくる。「もう僕らの夏休みもおわりかけているのだ」。

空っぽになって行く原宿の家の食料戸棚が、残りすくないカレンダーのように僕をせき立てる。「夏休み」がおわった後、僕らにのこされるものは、何もない。すべてが、十二時過ぎたシンデレラの衣裳同様、あとかたもなく消え去ってしまうことは明らかなのだ。

そして、「僕」は「金さえ出せばものを買える」ということを不意に思い出す。「僕」は「うれしさのあまり」「あの食料戸棚がいっぱいになれば、また夏休みがかえってくる」というような「おかしな錯覚」を起し、買物に行く。

食料品店で、僕は不意打ちの戸惑いを感じた。軒先からぶら下がった大きな塩漬けの魚やソーセージ、その他いたるところにギッシリつまった食いの壁が、四方から僕を包囲して、圧倒された。[...] こんなことは悦子と知りあうまでは感じたことがなかった。僕は店員に値段をきいたり払ったりするとき、いちいち恥ずかしいような気がするのだ。[...] こんなものを買うなんて俺のガラじゃない、などと思った。

ここにある「戸惑い」は、接収家屋という「ゴッコ」の世界＝虚構世界から離れた「僕」が「食料品店」という現実と接触した故に生じている。そして、「僕」は、食料品の買物という、端的に〈家庭〉生活を思わせるものに「戸惑い」を感じ「まごついた」のである。

「僕」は接収家屋で自分を〈夫〉とイメージし、あるいは悦子に合わせて〈子供〉でい続けようとしていた。けれどそれらは全て、あくまでイメージに過ぎず、所詮は「ごっこ」遊びでしかない。擬似的な家族ごっこをしていただけなのである。そこには現実的な物語＝家族再生産は全く存在していなかった。ところが、ここに至って、悦子のために食料品を購おうとしている「僕」は一気に現実を直視する。自分が買物をするとい

う〈家庭〉的な行為は、「恥ずかしい」ものなのであり、「こんなものを買うなんて俺のガラじゃない」と思う。「僕」は現実的に〈夫〉の役割を演じることには「戸惑い」を抱かざるを得ない。

ただしここで、食料品店で買物をするのが〈夫〉の役割を演じていることになるかは微妙なところである。「僕」は「悦子に影響されて」「こんなもの」を買いにしている。それらは接収家屋という御伽空間＝〈子供〉の世界を継続するためのものであるが、「僕」が「こんなものを買うなんて俺のガラじゃない」と思う背景には、「こんなものを買う」のは〈女〉のやることであるという認識があるのかもしれない。

御伽空間＝〈子供〉の世界を抜け出し、食料品店という現実に戻った「僕」は〈子供〉や「ごっこ」としての〈夫〉から、アルバイトの日本人青年＝〈男〉に戻っている。だとすると、ここにある戸惑いは、自分が女性ジェンダー化されることの戸惑いと見えなくもない。これを占領下の文脈で考察するならば、女性ジェンダー化される敗者＝日本人〈男性〉というイメージが浮き上がる。例えば、マイク・モラスキーは占領や侵略が「進軍する男性により性的侵攻」を受けた「女性身体」のイメージで語られることを指摘してから、次の様に言う。

無力な男性はたいがい、去勢や不能といった性的メタファーを用いて描かれ、占領下の男性を「女性化」し、外国占領下での男性の社会的無力を、おそらく通常の社会的条件下で女性が帯びる無力さと同等なものとして位置づける。¹⁴⁾

マイク・モラスキーにおいては、さらにその「性的不能」と「言語的不能」が結びつけられていることまで考察されているが、ここでは、〈敗者〉＝日本人男性というあの図式とジェンダーの問題を指摘するに留めておこう。それはあとに見るように、「僕」が時間を間違えてグレイゴーに挨拶した時と悦子に性的に拒否された時の違いにも表れている。「僕」はグレイゴーに対し「恥じた」後、「恐ろしさ」を感じるが、悦子に対して「羞恥」を感じた後、「怒り」を覚えるのである。ここには占領下の〈男性〉が、占領軍に対して「恐ろしさ」を感じ、同じ敗戦国民の〈女性〉に対しては「怒り」を投げつけるという抑圧された構図が見えなくもない。

6. 絶対的権威、「眉の太い、威厳のある顔」

さて、米軍接収家屋という〈外〉の世界で、「現実」に接触し、戸惑いを抱いた「僕」には、さらなる戸惑いが待っている。「両腕いっぱい」食料品を抱え、「僕」は「意気こんで」店を出る。グレイゴー中佐の家は、「細い横道をのぼりつめた坂の上に建っている」。ようやく坂を上ると、いないはずのグレイゴーの自動車が横づけにされている。

……帰ってきたのだ。「一週間はやすすぎるじゃないか。」と文句を云ったところではじまらない。疲労のせい、ただアッケラカンとするだけで、僕はそれほど失望もしなかった。

そのまま引き返そうとするが、「せめてひと目だけでも」という気持ちで「僕」は進んでいく。

グレイゴー中佐は軍装でポーチの上に立ち、手にしたパイプで、トラックから運び出される大小の函を指揮している。僕は躊躇しそうになる自分の心を、強いてふみにじりながら、門をはいった。

「グウド・モオニング」

中佐は返辞をしなかった。眉の太い、威厳のある顔を、ケゲンそうにゆがめて、ジロリと僕を見た。それだけで、僕の敗北だった。

「僕」は挨拶を間違えたことに気付く。今はもう午後二時なのである。

僕はなぜか非常に恥じた。と同時に恐ろしさが、それにつけこんで猛烈ないきおいで襲いかかり、僕は咄嗟に、ふりかえるが早いか駆け出すと、坂をころび落ちるように逃げた。

そのままバイト先の店に戻った「僕」は、「云いようのない屈辱感と自己嫌悪のうちに、しばらく悦子のことを忘れて一日を送った。

ここには紛れもなく、敗戦国民の「日本人男性」である「僕」の、敗戦国民としての屈辱感が描かれている。この一切の〈公〉的なものから排除されて、〈子供〉の世界にいるかに見える「僕」にも、〈公〉にもとついた屈辱感は否定しがたく存在する。「僕」はあれだけ悦子のことで夢中になっていたのに、グレイゴーに「敗北」してから、悦子のことなどすっかり忘れている。「僕」を占めていたのは、あくまでグレイゴーとの謁見における「屈辱感」と「自己嫌悪」なのである。

ここには本質的な問題が隠されている。繰り返すが、「僕」にあるのは、あくまで〈敗戦国民〉＝〈敗者〉であるという意識なのである。「僕」はその現実を無視したところで成り立つ悦子との「ごっこ」遊びに夢中になっていた。それは、あらゆる帰属、集団、家族から切り放たれた〈孤児〉としてのみあることだった。けれども当然、「僕」にも実家があるはずであり、悦子にも、メイドになるまえには〈家族〉との関係があったはずである。そして、二人を〈孤児〉にしているのは、他でもなく、敗戦という現実、占領

下という状況なのである。

ここで想定されているのは、先にみた、〈権威〉の崩壊という事態である。〈敗者〉となった〈父〉を持つ〈家〉から逃れてきた〈子〉はあくまで〈家〉という帰属集団から離れた〈孤児〉となって存在するしかない。しかし、同時にそこには新たな〈権威〉＝〈勝者〉＝〈アメリカ〉が存在しているのである。

そのような「僕」の隠された〈公〉への意識は、悦子をめぐり方でも確認できる。もしも、悦子が接客家屋のメイドでなければ、「僕」は悦子を「自分のもの」にすることが出来たかもしれない。しかし、「僕」にとって、悦子は端から手に入らないものだと分かっているからこそ、悦子に夢中になるのである。ここには微妙なパラドックスがある。

「僕」は悦子がグレイゴーのものだから欲しいのであり、そして悦子がグレイゴーのものだから手にはいらないと分かっているからこそ安心して近づける。

要するに、「僕」は最初から〈敗者〉になるしかないのであり、その〈敗者〉であることに安堵を見出してもいるのである。悦子が欲しければ、「僕」はグレイゴーに勝たなくてはならない。しかし、当然それは出来ない。最初から〈勝つ〉ことの出来ない占領下という状態で、結局、「僕」は〈孤児〉となるしかない。つまり、〈敗者〉であることの隠蔽のために、現実逃避の手段として虚構空間は成立していたのである。

この「日本人青年」の「僕」には、〈敗戦国民〉の無力感という同時代の感覚が確かに受け継がれている。あくまで、「僕」が楽しむ虚構空間は、グレイゴー（食料に溢れた接客家屋）がなければ成り立たないものなのであり、これがなければそもそも悦子と「僕」の恋愛ごっこも成り立たない。ここには確固とした形で〈アメリカ〉が存在している。この一見〈私〉的世界におけるパラドックスは、江藤が論じたように、後の対米従属の日本社会のあり方を髣髴とさせる。それは単純に言えば、アメリカなしでやっていきたいが、アメリカなしではやっていけない、というパラドックスなのである。

次第に落ち着きをとりもどすと、一昨日までの生活が [...] 取りもどしようのない所にあるのが明瞭になるにつけ、悦子のことがたまらなく僕の胸を打ちはじめた。それは僕がどれほど強く切望しても、かなえられない望みなのだ。僕はいまになって、接客家屋の番号をうった小さな木の札が、名実ともに交戦中の敵の手に陥ったものをあらわしていることに気付いた。

さて、事態は変転を迎える。もう悦子との日々は帰ってこないと思った「僕」だが、その夜、悦子は「僕」のいる猟銃店にやってくる。グレイゴー中佐夫婦は突然帰宅したものの、また休養しに出掛けてしまったのである。つまり、休みが延びたのだ。

それから、ついに「僕」は「彼女を抱」こうとする。途中、「からみつく彼女に自由をうばわれて僕は何べんも倒れそうになり、「もう二人とも軀を起してはいられなかった」。

僕は確信した。この女とはもう離れられっこない。彼女と僕とは、とけあって完全に一つになるべきときが来た。

ところが、それは「僕」の「燃えたったあまりの誤算」であった。

悦子のスカートのまわりをさぐっていた僕の手が突然ふりはらわれたときには、しんから、びっくりした。そして何かの間違いではないかと思った。

「いけないわ、そんなこと。」

そう云って彼女は、また僕の手をはらいのけた。

「僕」は「しんから、びっくりし」「何かの間違いではないか」と思う。咄嗟に「羞恥」を感じるが、それはすぐに「怒り」に変わる。

「それなら何故来たんだ。」とどなった。実際僕は、彼女の頸をしめ殺したくらいだった。が、それもながくは続かなかった。興奮しきっているくせに、力がひとりでに抜けていくのだ。

「もはや抗いはしない」悦子に、「僕」は困惑を感じる。そして、こんな認識を抱き始める。

僕の疑問は「夏休み」のはじめ、彼女がヒグラシを鳥だと云った頃にさかのぼった。そしていまは、僕の見当ちがいが、悦子がまったくの少女にすぎなかったことが、あきらかにされたと思った。

実際、悦子の「子供ッポさ」がわざとではなく、彼女が「まったくの少女にすぎなかった」かは疑問である。少なくとも、「僕」がそのように認識し直すしかない立場にあるというだけである。ここでは、悦子の「子供ッポさ」がどうであれ、「僕」が悦子に望むことと悦子が「僕」に望むことに食い違いがあったと分かるだけなのである。

結局、「僕」は板ばさみの状態に追い込まれる。

何かひと言と思うのだが、言葉を探すことはムダだった。何を云ったところで、このしらじらしさを増すことになるばかりなのだ。……放っておけば手の届かぬ距離にまで、はなれてしまうのかもしれない。と云って、いま僕が言葉をかけるとすれば、それは自分の手で彼女とのつながりを断ち切ることにしかならないではないか。

ここでは、先にみた電話における二人のあり方が思い出される。「僕」たちは、「実体のないただの言葉の形骸」にしか触れることは出来ない。「ただ一つのことを、押したり引いたりしあう」しかなく、しかも「その一つのこと」は「僕」にも悦子にも「何だか解らない」。お終いに「動物の鳴きマネ」という無意味な行為をするしかない。

それは結局、彼ら二人の〈孤児〉たちが、端から恋愛という二者関係を築けないことに起因している。「僕」も悦子も、接収家屋という虚構空間で、自分自身のイメージだけで「ごっこ」を演じていたにすぎないのであって、究極的に一方にとって、他方は、「ごっこ」遊びの共演者に過ぎず、現実的な生身の人間として、他者としては存在していなかったからである。例えば、それは、「僕」が自分を〈夫〉としてイメージしながら、一方では悦子を〈娘〉として見てしまうというズレにも表れている。「僕」にとって、悦子は〈夫〉の対となる〈妻〉としては見られていなかったのである。

ここにあるのは、完全な〈子供〉の世界である。自分自身のイメージ世界にだけ没頭しているという意味でそうなのである。そして、〈家族〉を排除し、あらゆる〈権威〉を排除したかに見えたこのお伽空間＝「ごっこ」の世界は、子供のごっこ遊びがそうのように、実際のところ頼りないものでしかない。この小説世界で確固とした〈力〉を持っているのは、グレイゴ―中佐に代表される〈アメリカ〉ただ一人である。

7. 占領・アメリカ・父の不在

アメリカという圧倒的な強さ、圧倒的な〈権威〉の前で若い日本の男女は〈息子〉〈娘〉、というよりも〈孤児〉としてのみ存在するしかない。あらゆる〈権威〉が崩壊し、家父長的な〈権威〉が統治する〈家〉を持たない（敗戦国民）の〈息子〉と〈娘〉は、〈権威〉から解放され、あらゆる帰属から離れ、〈孤児〉として自由な恋愛を謳歌することも出来たであろう。けれども占領下では、それらの〈孤児〉となった彼らを纏め上げる別の〈権威〉が存在していた。それが言うまでもなく、〈アメリカ〉なのである。

ここには、江藤が問題化した〈父〉の不在、〈治者〉の不在という問題に繋がるものがある¹⁵⁾。

なにものかの崩壊や不在への「恐怖」のために、人は「治者」の責任を進んでになることがある。しかし「治者」の、つまり「不寝番」の役割に耐えつづけるためには、彼はおそらく自分を越えたなにものかに支えられていなければならない。

しかし、

「父」に権威を賦与するものはすでに存在せず、人はあたかも「父」であるかのよ

うに生きるほかないのかも知れない。彼は露出された孤独な「個人」であるにすぎず [...] どこにも自分を保護してくれる「母」が存在し得ないことに怯えつづけなければならないのかもしれない。

これを受けて、加藤典洋は次のように語る。

江藤にとっての問題が、「個人」は、どのように「父」(=国家)の不在と関係をもちつつ、成熟できるかというものであったことは疑いようがない。不在の「父」を無視することはたやすい。しかしその時には、ぼく達は、じつは第二の「父」ともいべきもう一つの権威に帰依しているに、すぎないのではないか。なぜなら、ぼく達の「父」不在は、それこそアメリカという第二の「父」の現存と対になっているのであるから。¹⁶⁾

加藤は「ぼく達にとっての「成熟」の途は、現存する第二の父に帰依せず、といて不在の「父」を待望せず、「父」の不在にたえる」しかない、と結ぶ。江藤にあった「困難」は「この「個人」と「国家」(不在の国家)の二律背反」なのである。

結局、占領下で〈孤児〉として存在する二人はそもそも最初から〈敗者〉であったのであり、この占領空間全体に位置する、唯一の〈勝者〉＝グレイゴーに屈服するしかない。

悦子と「僕」はついに別れることになり、「僕」は「もう何をする気もしなくな」る。「僕」は、つながらない受話器を耳に当てている。「何もきこえはしない」。けれども「僕」はかつて悦子とのつながりのツールであった「受話器をはなさない」。

僕はいつ迄も受話器をはなさない。ダメされていることの面白さに駆られながら。

結局、あらゆる〈権威〉から遠いところにいるかに見えた「僕」と悦子だが、その虚構空間＝「ごっこ」の世界は、あくまで占領軍接收家屋という装置によって成り立っていただけなのだ分かる。〈敗戦国民〉の二人は、極力その現実＝〈公〉的なものから目をそむけようとしたが、それは完全に排除することなど出来ない確固としたものとしてあり続けている。そして、確固とした〈権威〉であるグレイゴーに屈服するしかないと分かっている「僕」は、最後に「ダメされていることの面白さ」に駆られる。この「ダメされる」という服従のあり方は、他の安岡作品の主人公たちにも通じる〈敗者〉であることの受け入れを意味する。この「僕」も〈敗者〉であることにある種の安堵を覚えている。この〈柔らかい〉服従のあり方は、江藤淳が1970年に定式化した、日本の対米従属のあり方に通じるものがあるといえる。それは、加藤典洋が指摘したように、

「ぼく達の「父」の不在は、それこそアメリカという第二の「父」の現存と対になっている」という事態である。「ガラスの靴」の「僕」は〈家族〉から切り離され、〈父〉という〈権威〉から切り離されて存在しているように見えながら、そこにはグレイゴーという「眉の太い、威厳のある顔」がツねに立ちほだかっているのである。

「註」

- 1) 講談社文芸文庫『ガラスの靴 悪い仲間』（1989年）解説。また本文引用は以下すべて、この講談社文芸文庫版に依る。
- 2) 例えば、三浦雅士は、「ガラスの靴」について、戦後生まれの村上春樹の作品との同質性を指摘している。（『メランコリーの水脈』福武書店、1984年）「ガラスの靴」の「新鮮さはその数世代後の若い作家の作品に通じる新鮮さである」（144頁）。実際、村上春樹自身も、安岡の「ガラスの靴」のように、主人公たちの置かれた状況、「具体的な「外なる現実」を「極力省いて」、仮構したところで小説を書こうとした、と語っている。（『若い読者のための短編小説案内』文芸春秋、1997年）111頁）
- 3) 「第三の新人」という呼称に関しては、命名者とされた山本健吉をはじめとする座談会（「群像」1964年3月号）に詳しい。
- 4) 服部達「新世代の作家達」（「三田文学」1954年5月号）。ただし、服部は決して第三の新人に批判的なわけでない。単に事実として分析しているだけであって、むしろ彼らに好意的である。
- 5) 「芸術的均衡の美しさ—「ガラスの靴」について」（「国文学解釈と教材の研究」1977年8月号）
- 6) 『安岡章太郎全集』（講談社、1971年）解説
- 7) 『〈民主〉と〈愛国〉—戦後日本のナショナリズムと公共性』（新曜社、2002年）275—276頁
- 8) とはいえ、戦争遂行過程で、女性は単に「銃後」にいた被害者なのではなく、婦人運動に代表されるような、女性側の積極的な参加があったことも指摘しておく必要がある。以上は、上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』（青土社、1998年）に詳しい。
- 9) 清岡前掲論文より引用
- 10) 「「ごっこ」の世界が終わったとき」（「諸君！」1970年1月号）
- 11) 「或る喪失の経験—隠れん坊の精神史—」（初出1981年）（『藤田省三著作集5精神的考察』みすず書房、1997年）
- 12) 藤田前掲書14頁
- 13) ここで間接的に示唆しうるのが、占領下の検閲の問題である。アメリカという〈勝者〉のもとで〈敗者〉＝日本人は「実体のないただの言葉の形骸」ではない「言葉」を使用することがいかに可能なのか。本稿ではこれ以上踏み込まないが、ここには江藤淳が問題化し続けた検閲と戦後の言説状況という議論に近いものがある。

- 14) 『占領の記憶／記憶の占領戦後沖縄・日本とアメリカ』（鈴木直子訳、青土社、2006年）67
頁
- 15) 『成熟と喪失』（講談社文芸文庫、1993年）
- 16) 『アメリカの影』（講談社学術文庫、1995年）144-145頁